

昔むかし、あるところに、ひとりの鍛冶屋がいました。家族みんなが暮らしていけるだけのかせぎがあつたので、パンに困ることはありませんでした。

ところが、ひどい時代がやって来て、食べ物が何ひとつ育たなくなつてしまいました。食べる物のなくなった人々は、わらを粉にして、パンを焼きました。国じゅうが飢えに苦しみました。もちろん、鍛冶屋の家にも、食べる物はありませんでした。

ある日のこと、物乞いのじいさんが、鍛冶屋の家に来て来ました。じいさんは、祈りの言葉を唱えながら、家の前に立ちました。けれども、鍛冶屋はじいさんにやる物が何もありませんでした。何をほどこしてやったらいいのでしょうか。すると、じいさんは、肩からかばんを下ろして、残りもののパンくずを探し出すと、鍛冶屋にわたしていいました。

「食べなさい。神さまの決められたことだから」

鍛冶屋とおかみさんや子どもたちは、お腹がいっぱいになるまで、パンくずを食べました。それでも、カバンには、まだパンくずが残っていました。

「わしといっしょに、広い世間を旅してみないか」と、物乞いのじいさんはいいました。鍛冶屋は、承知して、自分のかなづちを持って、じいさんといっしょに旅に出ました。

鍛冶屋とじいさんは、おしゃべりしながら歩いて行きました。何日かすると、大きなお城に着きました。お城には、みごとな庭と、大きな宮殿と、美しい道がありました。ところが、お城の塔には、黒い旗がからまつていました。

ふたりは、とてもお腹が空いていたので、何かめぐんでもらおうと、お城に入ってきました。お城の中は、悲しみにしずんでいました。じいさんは、料理番の女にたずねました。

「なぜこのお城は、こんなに悲しみにしずんでいるのかね。何か悪いことでもあつたのかな」

料理番の女は、答えました。

「王さまのたったひとりのお姫さまが、病気で、世界じゅうのどんなお医者も治すことができないんですよ」

じいさんは、

「それなら、わしが、お姫さまをみてあげよう」といいました。

「おまえさんに、何ができるっていうの」

「ひよつとしたら、お姫さまを治せるかもしれないよ」

じいさんが、王さまの所に行くと、王さまは、

「姫を治すことができたなら、王国の半分^{はんぶん}をあたえよう」といいました。じいさんは、

「わかりました」といって、湯殿^{ゆどの}をあたためて、風呂桶^{ふろおけ}にお湯^ゆをわかすようにいいました。

お湯がわくと、王女は、湯殿^{はこ}に運びこまれました。じいさんは、鍛冶屋^{かじ}を連れて湯殿に入り、かぎをかけました。そして、王女の頭を切り落とし、体を四つに切り分けて、それをぜんぶ風呂桶の中に入れました。鍛冶屋は、びっくりしてさけびました。

「なんてことをするんだ。これじゃ、おれたちふたりとも命^{いのち}がないぞ」

湯殿の窓^{まど}からのぞいていた兵隊^{へいたい}たちは、戸^{かど}をめちやくちやにたたいて、

「戸を開けろ」とさけびました。けれどもじいさんは、平気^{へいき}な顔で、ばらばらになったお姫さまの体^{からだ}を洗いました。

赤かったお姫さまの体は、すぐに白くなりました。じいさんが、その体を板^{いた}の上に並べて手でなでると、頭も体も、もとのように、ぴったりとくつきました。それから、息^{いき}を吹きこむと、お姫さまは生き返って、すっかり元気になりました。

みんなは大よろこびです。王さまは、じいさんに、どんなにお礼をいってもいいつくせませんでした。

「約束^{やくそく}どおり、わしの王国の半分は、おまえのものだ」

けれども、じいさんは、それをことわっていいました。

「わしには、王国はいりません。どうぞ、チーズをひとかたまりと、りんごを三つだけください」

王さまは、じいさんの望^{のぞ}みをかなえてやり、ふたりをごちそうでもてなして、お城の外まで送って行きました。

ふたりになると、鍛冶屋はじいさんをのしりました。

「どうして、王国の半分をもらわなかったんだ。もらっていれば、こんなふうの旅して歩かなくてもよかったのに」

すばらしい富をことわったことに腹を立てて、鍛冶屋は、さっさとじいさんと別れて歩きだしました。

鍛冶屋は、ひとりで旅をつづけました。しばらく行くと、美しいお城に着きました。塔には、黒い旗がからまつていました。鍛冶屋は門番に、

「ここの人たちは、なぜ、こんなに悲しみにしずんでいるんだい」とたずねました。

「王さまのたったひとりの王子さまがご病気で、世界じゅうのどんなお医者も治すことができないんだよ」と、門番は答えました。

鍛冶屋は、物乞いのじいさんがやったのと同じ方法で王子さまを治してやろうと思いました。王さまに申し出ると、王さまはよろこんで、湯殿を用意しました。

お湯がわくと、湯殿に王子さまが運びこまれました。鍛冶屋は、湯殿に入ってかぎをかけました。そして、王子さまの頭を切り落とし、体を四つに切り分けて、それをぜんぶ風呂桶の中に入れました。湯殿の窓からのぞいていた兵隊たちは、戸をめちやくちゃにたたいて、

「戸を開けろ」とさげびました。

鍛冶屋は、王子さまの体を洗いましたが、王子さまの体は、赤いままで白くなりません。あわてて、その体を板の上に並べて手でなでましたが、頭も体も、さっぱりくつきません。

そのとき、湯殿の窓から、物乞いのじいさんが歩いているのが見えました。鍛冶屋は、目に涙をためて、さげびました。

「じいさん、たいへんだ。どうか助けてくれ」

じいさんは、兵隊たちをかき分けて入って来ると、王子さまの体を白くなるまで洗いました。そして、板の上に並べてなでると、王子さまの体は、もとのようにぴたりくつきました。じいさんが、息を吹きこむと、王子さまは生き返って、すっかり元気になりました。

みんなは大よろこびです。王さまは、じいさんに、

「わしの王国の半分は、おまえのものだ」といいました。

けれども、じいさんは、それをことわっていいました。

「わたしは、王国はいりません。どうぞ、チーズをひとかたまりと、りんごを三つだけください」

王さまは、じいさんの望みをかなえてやり、ふたりをごちそうでもてなして、お城の外まで送って行きました。

ふたりになると、鍛冶屋は、また、じいさんをのしりました。

「どうして、王国の半分をもらわなかったんだ。もらっていれば、こんなふうに旅して歩かなくてもよかったのに」

けれども、鍛冶屋は、こんどは、じいさんのそばを離れませんでした。

ふたりは旅をつづけました。やがて、疲れたので、腰を下ろしてひと休みしました。

じいさんは、チーズとりんごの入っているかばんを自分のとなりに置いて、横になりました。そして、鍛冶屋に、砂の山を三つ作るようにいいました。

鍛冶屋は、いわれたとおりに砂を盛り上げていましたが、じいさんが眠りこんでしまうと、かばんから、チーズとりんごを取りだして、ぜんぶたいらげてしまいました。

やがて、じいさんが起きてみると、かばんには、チーズもりんごもありません。それに、砂はほんの少ししか盛り上げてありませんでした。じいさんは、自分で、もっと砂を盛って、大きな砂山にしました。それから、ひとつめの砂山は金の山に、ふたつめは銀の山に、三つめは銅の山に変えました。

じいさんは、鍛冶屋にいいました。

「欲の深いやつめ。好きなだけ持って行け。そして、おかみさんや子どもたちの所へ帰れ！」

鍛冶屋は、このときになって、やっと、物乞いのじいさんが神さまだったことに気がつきました。鍛冶屋は、深くおじぎをしてお礼をいいました。そして、金と銀と銅を持てるだけ持って、家へ帰りました。もちろん、鍛冶屋はお金持ちになりました。

鍛冶屋はとても盛大なパーティーを開きました。わたしもそのパーティーによばれて行っただけですよ。

再話…村上郁

資料『世界の民話33 リトアニア』虎頭恵美子訳／ぎょうせい